
狂科学時代

アサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂科学時代

【Nコード】

N4348P

【作者名】

アサト

【あらすじ】

時代は200年後の未来。

それは『彼』と呼ばれる人が持ち込んだ狂科学と呼ばれる技術が世の中に広がっていた。

主人公の葉月秋人はそんな狂科学者によって造られた実験体であり、狂科学技術を否定する旧国に潜入したスパイ。

そこで秋人は友達を作る。実験体の秋人にとっては何の意味も無かった存在。

秋人が変わっていく物語。

序章

時は西暦2100年。本当の西暦で言うと2200年。

知ってるだろうが、西暦っていうのはキリストが死んでから何年たったかって奴だ。

それが何で途中で止まってるかって？簡単な話だ。キリストの生まれ変わりって奴が現れたからだ。

2100年通称『創世の日』

彼はいきなり現れて、世界に対してこう言った。

『俺が世界を救ってやる。』

いきなり現れた彼を世界は疑った。しかし、彼はそのすべてを實現した。

エネルギー問題。全く考えられない鉱石を次の日には持つてきた。

科学者達が狂喜した。

温暖化問題。彼はすぐに変わると無責任に言い放った。そして変わった。科学者たちは嫉妬した。

先進国は喜んだ。これで更に世界は進むと。進歩すると。

だが、残念ながら今この世界を統べてるのは大統領でも何でもない。昔の古びた資本主義なんてとっくの昔に滅びてる。

何故かって？当時考えられる苦痛から逃れられた人類は彼を神と崇めた。つまり、彼はその時に限り神になったんだ。

神様が現れて世界は平和になった。それからの十年間あらゆる災厄も戦争も無かった。

しかし、そんな十年間も今では『空白の十年間』と云われ忌み恐れられている。

そして転機点が訪れた。人が神の知識を欲しだしたのだ。

そこから、狂い始めた。人と人が争い始めた。今までの戦争の比じゃない。彼が持ち込んだ技術は人を進化させ、より良い殺し合いを演じさせた。

「このままじゃ。皆死んじやうね。」

彼は人事の様に呟いた。力の無いものは彼に争いを無くしてほしいと糾弾した。しかし、彼は嬉々として首を横に振った。

「こんなに面白い事は他には無いよ。君たちも殺しあってみては？」
彼は神などでは無かったのだ。彼は悪魔だった。否、彼の持ち込んだ技術こそが悪魔だったのだ。

しかし、当時の人間はソレに気付かず、彼を殺した。

彼が言葉を唱え終えた時には、彼は倒れていた。

当時の国のトップが彼を撃った。

考えられない様な技術と容量を持った彼は信じられない程あっさりと絶命した。

彼の死が世界に与えた影響は限らないものだった。彼を撃ったのが一般人であつたなら、ここまでの事にはならなかったかもしれない。愚問だが彼を撃った奴がどうなったかつて？殺されたよ。むごつたらしく、頭を張り付けられて。体と頭が永久にさよならしてたらしい。

殺したのは彼を慕っていた科学者の内の誰かと言われているし、もしかしたら全員かもしれない。

こうして国のトップを失った世界は又バラバラになった。彼は世界をバラバラにする為にやってきた悪魔かもしれないとその後十年ぐらい囁かれた位だ。

そして、口にするのも馬鹿らしい『狂科学時代』が始まった訳だ。

序章（後書き）

初投稿です。良かったら感想お願いします。

始まりは制裁？

バシン

頭を叩かれ、意識が目覚める。だるい頭を起こし、あたりを見回す。くすぐすと声を殺した笑いが聞こえる。

思考。今は歴史の講義中らしい。声を殺す理由があるのはこの授業だけだから。理由って教師が怖いかららしい。

「おい、葉月起きろ。全くお前は学業の成績のみ優秀な奴が授業中に居眠りとは最悪だぞ。お前には関係ないかもしれないが、授業点とこのもあるんだぞ。さっき読んだところの意味は？」

講義を聴いていない人間が答えられるわけがないと言いたいのを我慢し、思考する。

与えられる時間は数瞬。真剣に思考すれば『答え』が出ないわけじゃない。葉月秋人^{はつき あきと}にとって授業はもっとも心が休まるときだ。そのことを踏まえ思考する。

結果。隣の秋月詩織^{あきづき しおり}が空けているページと教師が空けているページは正面からでも分かる程に違っている。どちらかがフェイク。まあ、結論は出ている訳だが。

「すいません。分かりません。」

教師は教科書を元のページに戻し、ページ番号を指示する。

- 正解。

正解は秋月詩織。彼女を見ると困った風に笑った。指示されたページに目を配る。数秒待つ。普通の人間と同じくらいのペースまで待つ。

そして当たり障りの無い回答。優等生としか見られないような回答。教師はそれを聞き頭をかき呆れながら言った。

「葉月、お前楽しいか？」

『楽しい』？そんな言葉を聴くたびに違和感を覚える。狂科学においてそんな考えは持つことは許されない。実験に倫理を持ち出すことは最大の愚行であり。最も恥すべきことだからだ。この国通称『旧国』では普通の考え。潜入の際、教え込まれた考えだがどうも理解できなかった。

それも当然かと秋人は考える。自分は生まれてからずっと実験体だからだ。それに葉月秋人はスパイだからだ。

「はい。」

できる限りの笑みを浮かべて返事をした。

「秋人君。さっきページを見せてたのに。気づいてくれなかったね。」

そういつて休み時間声を掛けてきたのはさっきの時間教科書を見せてくれていた。秋月詩織。

といつても、教科書を心なしかこちらに向けていただけで、普通の人間は気づかないだろうくらいだ。

こんな動作の一つ一つにさえも彼女の性格は表れている。彼女の性格を一言で現すなら臆病。その癖、人にかまってくる。要はお人よし。何故最初に臆病者と述べなかったって。お人よしには臆病者は含まれていないだろう？

「いや。気付いてはいたんだが、敢えて無視してみた。」

「何で？」

詩織が驚いて、声を張り上げた。クラス中がざわついた。そして全員が俺を睨んでいる。クラスのアイドルを苛めるなど無言のプレッシャーを掛けてくる。

既に詩織は半泣きだ。ちなみに半泣きとは一昔程前に使われてた言葉で、泣いてはいないが泣きそうという意味らしい。

『まあ、説明しないでも分かるよな』

「見惚れてたんだよ。」

ほめてみたら、詩織は真っ赤に茹で上がった。そして、またクラスに睨まれた。

始まりは制裁？

授業が終わり。少しの退屈から開放され秋人にとって怠惰な時間が訪れる。

隣の秋月詩織が弁当を広げこちらに差し出す。

「ありがとう。すごく美味しいよ。」

人とのコミュニケーションの取り方の教本を思い出し、感想を述べる。

「いつもだけど。秋人君、心こもってないよ。」

彼女の名前は秋月詩織。自分がこの学校に転入して来たのは一昨年。その時にクラスメイトが秋人と呼び。二人一緒に反応した。その後彼女に急に謝りだったので、そんな彼女を見て友人になつてくれと申し込んだ所、彼女は真っ赤になつて頷いてくれた訳だが、それから何故か弁当まで作ってもらっている。

彼女はドレスのような独特の服を器用に持ち上げながら、箸で取ったおかずを口に持つてくる。あの服は昔に流行った『ゴスロリ』という物らしい。黒いと白のドレスが彼女に似合っている。

彼女は俺の口元まで箸を伸ばし、「あーん」と呟いた。

それを聞いたクラスメイトが囁きだてる。そして詩織は赤くなる。いつまでも見ていてもいいが、可愛そうなので口を開こうとしたとき、後ろから叩かれた。

その衝撃で詩織の箸からおかずが零れる。可愛そうに涙目じゃないか。

「彼女さんが作る弁当を無駄にするなよ。秋人。」

そういつて箸で器用に俺のもとい詩織の弁当箱からおかずをさらつていくこいつは曰く『クラスの愉快犯』と呼ばれている。名前は源樹。みなもとクラスでのムードメーカーという奴らしい。

ついでに今さっき俺にぶつかってきたのはこいつだ。詩織のおかずを拾い上げ食べる。『三秒ルール』？非科学的だが、仕方ない。

「おいしいよ。」

感想を述べると笑ってくれた。笑ってるほうが可愛いな。何を言ってるんだ？俺は？

「この際、言つとくが詩織ちゃんこいつは勘違いしてるぜ。彼女に飯作ってもらうのが当たり前と思ってやがる。こんな時代に彼女に飯ウマなんて贅沢すぎるぜ。」

最初に俺の事を秋人と呼び捨てにしたのは源樹本人だ。教本には『人には依るな』とあったが、例外が二つ。一つは交友関係。一つは任務目標。

秋月詩織は葉月秋人と親密である。彼女の方から、コミュニケーションを求め近づいてくる。交友関係は人に溶け込む事に得意になる。一方で源樹は葉月秋人にとって任務目標の一人である。

『自分以外の狂科学を排除し最高の完成体であることを示せ。』
ふざけた任務内容だ。だが、出した本人は至って真面目だったらしい。嬉しそうに外の世界について説明してくれた。

俺にとって完成させた狂科学者であり、父親でもある男。結局名前すら教えてくれなかった男。名前が無いと不便と云えば。

「なら、父さん」と呼べと言ったふざけた赤毛の男。結局名前を教えてもらう機会は無かったのだが…。今、どうしているのか気になるといえば気になるが…

秋人は実験の成果であり、結論である。だから、葉月秋人は今や科学者自身という考え方も可能である訳で。

思考を整理する。思考を客観視する。幾ら考えても与えられた要因では成立しない。

『この街に送り込まれた理由を探る。』

それが現在秋人が理解する任務内容である。この街は魔女狩りも規定の人数居る上に治安も良い。

自分が送り込まれるとしたらもつと絶対王政まで逆行した独立国家

の方が都合が良いのにだ。理由を挙げるなら実験もできるし、効率よく実験体を殺せるからだ。

わざわざこの国に送り込まれた理由が一月経っても全く理解できない事が秋人を困らせている。

「秋人センパイ」

不意に肩を掴まれ上から覗き込まれる。均整のとれた顔が逆転しそのまま鼻と鼻がコツンとぶつかる。

振り返ると渡燐子^{わたりりんこ}がそこに居た。

ツインテールの女の子。チャームポイントの赤色の髪は爛々と輝いている。浅く焼けた肌と相まって健康的な印象を受ける。

そのまま秋人の肩に手を置きチョコンと座り込む。

「学校の先輩なだけだろ、凜子ちゃん」

振り返ると小首を傾げてはにかんだ。

「近づきすぎだよ。凜呼ちゃん。」

無くなるであろう日常にそっと別れを告げた。これが俺が選んだ『最良』なのだと自分に言い聞かせるように。

凜子と詩織が仲良く言い争う声が屋上に木霊していた。それを見て樹は笑っていた。

そして、秋人も。

十日後、源樹の母つまり現魔女狩りが殺された。

教会と異端者

源樹の日常がもう直ぐ変わる。

『いや、日常なんてとつくに終わってたんだよな。』

父も母も死んだ時点で樹は非日常にいたんだ。例えば知識としては分かっているけど日常の境界線はすぐ傍にあったと源樹は実感する。

そして今樹は教会の前に立つ。

教会は来るものを拒まぬと開いていた。暗い森の中彼は歩いてきた。友と別れを告げ、彼自身が復讐の為に。

教会と言っても、祈りを捧げに来た訳では無い。樹は文字道理、彼自身を捧げに来た。

狂科学を捨てたこの都市でも厳密に言うところ狂科学は実在する。それが教会。教会はまさに日常と非日常の境界になるが如く科学と狂科学に線をしいた。全ては異端（狂科学）を刈り取る為に。

「ミサの時間は終わりましたよ？」

一番前の席から女の子が出てくる。昨日も一昨日も繰り返した質問。黒のロングの髪に赤い瞳。服は女の子らしい水色の綺麗なワンピース。

赤い瞳が睨みつける。睨みつけられているのは樹。

「ミサに来たんじゃないよ。捧げにきたんだ」

「待って。」

彼女は大声で樹を制止する。

「それを言ったら。あなたは本当にこっち側に来ることになる。確かに私達は今人を探している。でも、それはあなたじゃなくても良い。だから…もう一度だけ考えてみて。」

「俺自身を捧げるよ。この街の為にさ。」

彼女の制止を振り切り、笑って宣言した。彼女もため息混じりに笑った。そして、しまったと赤くなった。

こんな場所でもそれは女の子らしくてとても可愛かった。

「では、ここで自己紹介を私の名前はアイシャ。ここ旧国の第1位の指導者です。あなたのお名前は？」

「書類に名前は書いてあると思うんだがどうだい？」

「それはそうですが、自己紹介というのは相手にさせる物ではないでしょう？」

意地悪をして嬉々する子供のようにアイシャと名乗った女の子は笑う。ククつと笑っている姿はやはり可愛かった。

「源樹。樹って呼んでくれ。」

「それでは樹。あなたは何を望むんですか？」

「勿論。魔女を殺す楔を。その為ならどんな事でも受けると誓うよ。」

アイシャは呆れ混じりにため息をつく。

「ここを訪れる人は大抵そうですが、魔女狩りというのを本当に理解していますか？魔女狩りとは狂科学を殺すために力を得る異端者です。又、半数はその過程で命を落とし、後の半分は狂って死にます。こんな救いのような無いものにあなたはなりたいのですか？」

「狂うとは言い草だな。俺の母は狂ってなんかいなかったぜ。」

全くこの女の子は人を脅すのが得意なのか、今までの可愛らしさは吹き飛びホラー映画並みの怖さだ。正直ちよつと帰りたくなった。

「狂うとは文字通りの意味ではありません。知っていますか？本来の魔女狩りがどうなったか？」

「残念ながら、歴史に疎いんだよ。」

「死にました。いえ、殺されました。魔女に関わった時点で彼らも異端だったのです。」

アイシャは樹を見つめ更に続ける。

「そして魔女狩りも殺されて最後に残ったのは誰なのでしょうね？」
アイシャは笑って呟いた。それは心からの笑みではなく、吐き捨てるような使い捨ての笑みだった。

「皆死ぬって事だろう。大丈夫。死ぬのは怖くないさ。しかも、そ

んな話今更だ。俺は生まれた時点で死刑なんだぜ。覚悟なら物心ついた時にはついてたさ。」

できるだけカッコがつくように吐き捨てる。彼女は一瞬キョトンとして『ああ、そうでしたね。』と呟いた。

「では、こちらの書類をお書きください。」

顔は笑っていたが、アイシヤは終始不機嫌だった。それは樹から見ても明らかだった。

教会と異端者？

「では、こちらを」

そう言つて手渡された紙。一見唯の紙だが、触り心地がなんとも言えなく気持ち悪い。例えるなら、蛇。触ったこと無いけど、なんかニユルニユルした感じ。分かるだろう？

「これって？」

「再生不可能紙ですよ。狂科学の一部です。ご存知の通りこれを処理すると文字通り再生が不可能になります。なんなら説明いたしましょうか？」

アイシャの申し出を断り、紙に目を通す。紙の中身は秋人なら一瞬で読んじまうんだろうが、生憎俺には無理だ。

「結婚相談か何かかこれは？」

読み終わり、率直な感想を口にする。そもそも名前から始まり、好きな食べ物で終わっているのはおかしいだろう。それに何だ。その……男女の経験はあるかとか。

「素直に書いてくださいね。それもあなたにとって大切な事ですから。」

アイシャに念を押され質問に答えていく。名前は『源樹』性別は『男』……と順当に書いていくが、男女経験『童貞』書いて泣きそうになった。アイシャは見てニヤニヤしてるし。

「少し暇ですね。折角ですから、再生不可能紙について少々お話をしてあげましょう。」

質問に切磋と答える内に、アイシャは椅子に腰掛けて語りだした。気がつくと隣にコーヒーが置いてあった。

再生不可能紙。それが表れたのは旧暦2100年。彼が作り、持ち込んだもの。

これは誰もが知っていることだし、彼の事をタブーとする旧国の民

ですら周知の事実だ。

この再生不可能紙を持って彼は言った。

「この紙を元通りに戻してみろ。」

そういつて紙は燃やしたのだ。当時の科学者達は灰の中から紙を探し、復元しようと躍起になった。何故なら、その紙には彼からの挑戦の意が込められていたからだ。

しかし、紙はどこからも出てこなかった。灰すらも出てこなかった。ある科学者は言った。

「紙など本当は無かった。彼は焼却炉に入れる振りをしただけだ。」
当時、彼の意見に真正面から対立する人は珍しくは無かった。しかし、その男は違った。彼と真正面、面と向かって否定したのだ。彼の絶大なカリスマをオーラを全てを正面から受け止め言ったのだ。余談になるが、その科学者は後に彼を支持する熱狂的なファンとなる。世にいう『五人の科学者』の内の一人となるわけだ。

「ストップ。終わったぜ。」

アイシャの話を打ち切り、紙を手渡す。質問には全て答えた。かなり恥ずかしくて普段なら赤面状態だが今の話のせいで、シリアス顔に戻ってしまっている。

「話を続けてくれないか？その話学校じゃ聞いたことも無いぜ。学校じゃ説明も何も無かったしな。それとアイシャのスピーチかなりカッコ良いぜ。」

言葉の通りアイシャの言葉には人を引き付ける、魔力みたいな物がある。妙な威厳みたいなものを全身からだしている。この重く正しい教会にはぴったりの訳だ。

アイシャは話を続ける。少しぬるくなったコーヒーに手をつけながら、樹は又アイシャの話に没頭する。

その科学者の後の名は『ハイム・ロウ』。通称『心理の魔法使い』。彼の心を唯一理解したといわれる変人だ。

そして、彼はハイムに続け様に言った。

「では、ハイム君。これがその紙だ。証明してみたまえ」

ハイムは紙を受け取り、研究室にこもった。当初、その紙を研究するために何人もの人間とチームを組んだ。

しかし、実験が進むにつれ彼の狂気は進んでいった。一日、何日？そんな概念を吹き飛ばして彼は研究した。

飲みもせず、食いもせず、ただ研究した。他の学者達はハイムの狂気と知性に恐怖し、一人また一人と離れていった。

ハイムの狂気が身を結んだのは、一年後。ハイムは研究室から出ると、待っていたかのようにそこに居た彼と泣きながら抱き合ったらしい。

「さて、問題です。樹君。この再生不可能紙一体当時の何を解決したと思う？」

急にアイシャは戻り、俺に聞いてくる。アイシャはどうやら知識を語るときに最も得意げになるタイプの様だ。

結果は知っている。結果だけは授業でやったのだ。

「地球温暖化だろ？それと有害ゴミの処理法とかだろ。」

まさに発想の外。処理としては最も優れているであろう消去。消してしまえば、害も何もあったものじゃない。包んで燃やせば良い。

本当に馬鹿げている。

「その通り。」

よくできましたと言わんばかりに、アイシャは俺の頭を撫でる。

「さて、この話は一旦お終い。続きはまたいつかね。」

くるりと回ってそれっきりと机の上の紙を取る。アイシャは紙面に目をやる。そうして、数分熟読したのち目を離す。

「いつごろぐらいに見つかりそうだ？」

狂科学を妥当しうる兵器へと昇華してくれる狂科学者が見つかるかどうか。

今、街には実験体が居る。それも既に街に交代で入った魔女狩りを

二人も殺している程の。今はまだ一般人には被害は無いが、いつ犯人の気が変わるかもしれない。

「それなら心配ないわ。私がしてあげる。」

彼女が笑った。今日初めて彼女に狂気を見た。

記録2

そこは世界とは一線を隔された場所。秋人達が通う教室。

教室の雰囲気はいつもとは違う。昼は学生たちの笑い声が支配し、夜になると静寂の闇が全てを支配する。

今は闇。生き物が元来恐怖し、恐れ敬う筈である場所。昼とは間逆のその世界に人影が3つ。

それぞれが全く違う形でその場所に居る。一人は笑いながら窓辺に腰掛、一人はぶつぶつと呟き期待に飢える赤子の様に両者を見つめている。否、それは観察と表現した方が適切なのかもしれない。

そして最後の一人は教室のドア越して立ち止まり教室の中を警戒し、他に敵が居ないかを確認する。

窓越しに腰掛けた男が立ち上がる。窓を開け、教室の入り口に立ち止まっている女に声をかける。

「狂科学の一片が消えるにはふさわしい夜だろう。俺がお前どっちが消えるんだろうな。お前はどっ思う？」

その声に込められた殺意に女は笑った。

女の名前は源葵。樹の母であり、義母である。

「でも、多分消えるのはお前なんだろうな。」

瞬間 - 銀を構える。源葵の狂科学『蓮銀』。

彼女の『蓮銀』は右腕の中に植えつけた銀昌を自身の電気信号で増幅し発動する。銀昌の濃度は通常の銀の1000倍の量を凝縮制御している。その銀自体を彼女の身体を動かす筈であろう神経系を駆ける電気信号で支配している。一度制御が外れれば自身を妬き滅ぼす、狂科学。

右腕の中に蓄積されていた銀が膨張し、溢れ出す。

知識としては知りえた情報を目の前にして驚愕する。知識として知りえた現実なんて、目の前の非現実にはあまりにも無力だった。そ

の押し寄せるような銀に、後ずさる事もできず転んでしまう。そんな銀は私に目を向く暇も無く一瞬で彼を飲み込み咲き誇る。銀製の花は咲き乱れる。咲いた銀の花には赤が混じっていた。その赤はゆっくりと伸びやがて花全体にまで行き渡った。

「命を吸い育つ花。こんな物は使いたくなかったんですが。」
自嘲的に呟き、乱れた前髪を整える。

「さて、この人が誰で一般人のあなたがこんな事してるのか答えてもらいますよ。」

『彼』から私へと向き直る。

腰が抜けて立つこともできない。顔を上げ彼女を見据える。子持ちには見えないほどのスタイルと、美形と言い切れる顔。そして何よりは狂科学『蓮銀』。こんなにも美しいものを生み出す狂科学。こんな物を生み出してしまった狂科学。今日彼女の願いを叶えに来た自分は『彼』の死により失敗したかのように思えた。

その瞬間にも彼女の後ろで咲いている花。その花がゆっくりとしなだれていく。彼女は気づかない。

「答えられないなら、拘束させてもらいます。安心してください。素直に話してくれるなら魔女裁判には掛けないでおきます。」

花はしなだれ銀の輝きを犯し黒く沈んでいく。その光を受け彼女は気付き振り返る。

だが、遅い。そこには花が枯れ落ち束縛から逃れた彼がたたずんでいる。

そして、何をする訳でもなく彼女をじつと見つめている。まるで獲物自身の価値を見定めるように、ゆっくり見る。

瞬間飛び掛かる。

狂科学の産物であろう脚力は音の無い跳躍を可能にさせ、彼女に気づかせること無く背後からの奇襲を可能にした。

それを見越したかのように彼女は腕を伸ばす。銀が伸び彼女を守り彼を貫く。

それでも、腕は彼女に対して腕を伸ばす。力の無い腕がしなだれ伸ばされる。最後の一押しと言わんばかりの銀が超至近距離で炸裂する。

彼を裂く針千本切り刻む。

しな垂れた指が彼の指先が源葵の額に触れた。

銀が弾け、彼が開放される。その姿は旧史のキリストを連想させる。崩れ落ちた彼はゆっくりと立ち上がる。

彼の穴あきの身体は綺麗に直っていく。人間の身体の治り方では無いのは明白で、蠅で穴を埋めるように白いものが身体の穴を埋め彼を形作る。波の色は銀。

「悪いな。お前と俺では相性が悪いんだよ。例えるならそうだな。火を剣でいくら切っても火は消せないだろう。」

勝利を確信したかのような笑みを浮かべ、嗜虐的な笑みを浮かべる。「分かったらおとなしく死んでくれるなよ？抵抗しない女を殺すのは犯罪的だが、俺が好むものじゃないんだよ。分かっているとと思うが俺が殺したいのはお前の狂科学でお前自身じゃないんだよ。」

「待ってくれ。彼女の狂科学を消してくれる約束だろう。彼女を殺す？約束が違うだろう」

声を張り上げる。主張する。しなくてはならない。

「残念だが、こいつは無理だ。お前の話では右腕の銀を取り除いて神経系を元通りに戻せば良い話だったが、実際のこいつの身体はて

んで訳が違う。まず肝心なこいつの身体自体が『超銀』の一種で転化されている。」

何を言っているのか分からないという顔をしている教授に向かって言葉を続ける。面倒仕方無いが、仕方無い。協力者の質問に答えるのも俺という狂科学だ。

「これは推察だが、過去に身体の半分以上を失っているな。この馴染み具合から言って数年前か？その時に触媒として、右腕の銀を膨張させて擬似的に身体にしたのか？」

「待て。そんな話は聞いたことが無いぞ。」

「ああ…そういう事か。」

笑いが止まらない。そういうことだ。

秘密を暴かれた女は憎そうに俺を睨みつける。最低な行為でも暴いてしまふ。何故なら俺は強者で他者は弱者だから。

「お前を抱いた男の気がしれないな。銀に欲情したのか？」

憤怒で顔を上げ、首を掴み殴り倒される。それでも笑いは止まらない。

「止めるんだ。葵さん。」

教授が女を俺から引き剥がす。

「あー。痛いな。痛覚は消えてないんだから。本当に止めてくれよ。」

頬を擦る。アレ？コレ？顎砕かれてない？なんつつ馬鹿力。

「そもそも言わせて貰うと女。お前もう終わってるんだじゃえ？」

そういつてビシッと指を指す。カッコいい俺。な訳なく決め台詞噛んじやった。ちゃんと顎直してから言うべきだったな。

そう彼が指を指した瞬間彼女の身体から火が上がる。

オレンジ色の暖かい光。反射的に手を離す。次に耳を裂くような悲鳴。

それは源葵の悲鳴でコートを脱ぎ捨て、打ち払う。火は消えず纏われた炎は他の物に興味が無いかのように彼女のみに付き纏う。

「そんなんじゃないやあ。女の火は消えないって。そんな事より教授飯食おうぜ。腹減るんだよ。これさあ。」

カーテンを引き裂き火を払う。火は消えない。払うことすらできない。

「だからあ。そんなんじゃないや無理なんだよ。分からないと思うけどさ。俺がやったのはそもそも物質の破壊じゃないんだよ。云い得て妙だけどエネルギー自体の燃焼なんだよ。だから、そいつはもう死ぬし、それはけっして変わらない。」

「ウルサイ」

怒鳴る。彼女を助けなければ。水を汲めば、助けられるのではないか？安易な考えを呪いたくなるが、水を汲みに廊下に走り出す。

グイッ

足を掴まれる。見ると源葵は口元を動かさ

『タスケテ』

と呟いた。

その一言で自分の中のナにかが音を立てずに崩れ去った。

記憶の中の源葵は泣いていて。彼女の思い出が頭の中を駆け巡って、大した交流も無いくせに思い出だけは鮮明で。街で会って笑いながら挨拶してくれる理想の人。息子の将来を真剣に考えて、相談してくれた人。相談の最中息子の将来の話がいつの間にか彼女の夢の話になっていった事もあった。

『私はねあの子には魔女狩りなんて物騒な言葉の無い世界を見せてあげたいんですよ。魔女狩りの私が言うのもなんですけどね。』

その時に語った彼女の笑顔が可愛くて可笑しくて。その夢が狂科学に憧れる自分だけを変えてくれたのに、それなのに俺は彼女を救うどころか殺してしまった。

回想と共に私の意識は崩れ去った。

幕外

学校のグラウンドを一人で歩いている。教授の姿に興が冷め教室から出てきたのだが。

狂科学を打倒したよるはこんなにも気持ちが良いのだろうか？それとも夜風が気持ち良いだけだろうか？

「月が綺麗だな。新月って言っただけ？これ？」

はてさて、最近物忘れが激しいから困るな。

「新月じゃない。三日月だ。これ位は常識だから覚えていた方が良
いぞ。」

グラウンドの向こう校門の人影が答える。

「ありがと。この頃物忘れが激しくてさ。」

おそらくは狂科学の副作用だろうな。怖い怖い。にしてもおかしいな。近親感どつかで見たことあるぞこの影。

「ところで、君だあれ？」

目の前のゾクゾクさせるような感覚。この感覚の根源は何なんだろう？

「お前こそ。その服の刺激臭なんだ塩素系の薬品かチタンの合成金属か何かつけてるのか？」

影が揺れる。心踊る駆け引きに饒舌になってしまふ。

「君こそ馬鹿じゃないのかな？チタンは匂わないでしょ。常識的に考えてさ。」

「俺が言いたいのはそんな事じゃないよ。分かてるんだろ？お前のその匂いは超金属である『超銀』の制御『前』の匂いだ。そんな物を身につけて生きてるなんて普通じゃないよな。」

この影は人を馬鹿にするのが得意らしい。どうにも困った。口ではあっちの方が断然上らしい。

「源葵を殺したな？」

「誰それ？」

オチヨクツテミタ。

「ウソウソ。睨まないで。あの女の名前そんなんだったかな？教授もそんな事言ってた気がするし。そうだね。正確には現在進行形で殺してるところかな？」

答えを聞き右腕に影は何かを持ち出す。これって銃じゃない。ちよつと待ってお巡りさんやバイです。危ない人がいます。助けてください。殺されるー（笑）。

「ちよつと待ってどこから出したのソレ？っていうか何なのソレ？」校門の影はゆっくりと近づいてくる。ファイティングポーズを構え『コイヤ』の構えを取る。

一触即発の間合いを取り、仕合が始まる。筈だった。

「アレ？コレってバトルパート突入って流れじゃなかった。何でいっちゃうの？」

そのままあつさりと校舎の方に通り過ぎて行った。

「戦うにしても後にしてくれよ。デートの予定があるんだよ。」

後ろで手を振り影は校舎に消えていった。真黒の校舎に消えていった。

「チエツ、毒気抜かれちゃったな。」

悪態をついて、帰路に着いた。何だよ。こんな悲しい悪役居ないだろ。

秋月詩織の日常

『行動は迅速にそして結果は完璧に。勿論求める物は高ければ高いほうが良い。』

「その行為を究極にまで犯したのがこの能力か・・・」
自己を開発したであろう狂化学者に対する悪態が絶えない。

今は授業中。ちょうど昼飯の時間を終え、この授業が終われば家に帰される時間となる。いつもなら最後にもう一限あるのだが、連続魔女殺しの事件のせいで暗くなる前に帰れとの事らしい。

そんな話を終え、目の前では正史の授業が続けられている。今は日本とアジアの関係から学ぶべき所を先生が要約している。

もつとも説明している日本に至っては現在存在すらしていない。正確にいうと、海面上昇による陸地の消滅の結果だ。

その代わりの技術として狂科学の『浮き島』技術によって、人の住める面積は元の旧科学時代よりも確実に増えている。

この浮き島も一部の狂科学者が作り出した技術で正確に教師も理解はしていないし、理解するつもりも無いのだろう。

たとえ自分が狂科学の恩恵を受けていようが、この旧国では狂科学は存在すらタブーなのだ。それを誰も争わないし、話にしない。

『進歩を辞めた国か…』

秋人は内心想う。この国が世界から何と呼ばれているか。

世界中で割合を取るとするなら、狂科学サイドに立っている国の比率は約3割。それも近年増加傾向で魔女狩りの数も足らなくなっている筈だ。

『そこで樹の存在だ。』

人手不足の魔女狩りが樹の希望を断る訳が無い。

つまり、遅かれ早かれ葉月秋人は源樹の敵になる。それは源葵を救えなかった秋人の責任。

問題はもう一つの可能性。コレは下手をしたら詩織まで巻きこみかねない問題。

それが昨日源葵の部屋を搜索している時に出てきた。魔女狩り達が個人個人に提供される再生不可能紙の手帳。通称『魔女張』

そこに記されているのは魔女狩りの仕事要項と本人の写真そして自身の制御を担当する指導者。

『魔女張は魔女狩りが仕事を遂行する時には必ず持ち歩く物。それが残っているって事は…。』

源葵に戦う意思は無かったという事だ。少なくとも源葵を呼び出したのは近くで気絶していたあの男で間違いない。

『旧国 魔女狩り指導者第一位 アイシャ・ノーズ 所属『アーカイブ』 滞在歴 10年 年齢18歳』

魔女張に記されていたあまりにもふざけた事実。

何故あの自称『父さん』がこの国を選んだのか良く分かったよ。何度読み込んで出てくるのは舐めているとしか思えない経歴と順位に半ばめんどくさいと思うのを禁じていない。

魔女狩りの第一位の指導者がこの街に居た。ある程度は予想していたが想像外すぎる。これなら新型の大量破壊兵器なんかの方がよっぽどまだ。

本来、魔女狩りの指導者第一位から第十位までは完全な秘匿扱いで世間一般では旧国の無数のどの街に居るという事実しか知られていない。それが十一位以降と一線を隔されている理由としては『五人の科学者』に関連する技術をそれぞれのナンバーが受け継ぎ継承しているからとも言われている。

順位が指導者直接の技術力を意味する訳では無いが、それでも一位という数字を持つものは異常に非凡だろう。

その事以前に第一位の指導者が居なければならぬ程の物がこの街にあるという事。この問題を解決しなければ前に進めない。

更に出てくる問題は樹の狂科学は何時までかかるのかという事だ。最低、一ヶ月と読んでいたがそれもあてにならなくなってきている。

その問題が秋人の思考を僅かにだが曇らせた。だが秋人は忘れない、楽になる事が幸せになる事ではないのだから。

詩織は夢の中女の子に出会う。

女の子は三人居て、それぞれが過去の自分だった。

世界で一番美しいものは何かと聞かれたら彼女はこう答えるだろう。

『人形です。』と。

秋月詩織の心の原風景にまで遡るであろうおとぎ話。

秋月詩織は孤児だった。戦場で拾われてきて豊かだったこの街の孤児院で育った。

彼女にとって親は居なかったが、それも大した苦悩だとは思っていなかった。

その環境が彼女に思わせたのは記憶の彼方の望郷の情でも愛情に対する飢えでも無かった。

その感情は『退屈』。この世の中にある出来事は自分の決して知る事ができない場所で起こっていて自分は何もできないとまで彼女に思わせるまでだった。

その後、詩織の人生の転機が3度程訪れる。

一度目は10歳の時に一月だけ同じ孤児院に居た名も無かった少年との出会い。

彼はいつもピエロを演じていた。その事に彼が気付いていたかどうかは分からなかったが、詩織は気付いていた。

彼は引き取られ名を授かった。でも、もう傍には居ない。

その時に自分は空虚じゃない。ただ空っぽだったんだと気付いて初めて心の底から喜んだ。目の前に喜ぶ自分が居る。

2つ目の転機点15歳の時、詩織が容姿ともに美しく育った時期だった。

『人形のような。』

金持ちも腐った豚が詩織を買っていつて貪った。

泣いている自分が居る。泣きじゃくってグシャグシャで思い出したくも無いような格好で媚びている。

それからずっと媚びている。いつしか私は不幸だった。

3つ目はいたって単純で葉月秋人との出会い。

出会った最初の秋人はまさに人間のフリをしている人形だった。何も大事な物なんて無くてただ喋っている、動いている。そんな誰かの操り人形。

だから詩織にとって都合が良かった。詩織にとって秋人は自分よりも空っぽで綺麗だったからだ。

でも、それだけじゃなくて最近では秋人を思うだけで胸が熱くなる。

『汚れた私は人形には触る事はできないのに。』

夢が覚める。そう直感させるような内臓が浮くような、何か焦る焦燥感が込み上げてくる。

その焦燥感の正体は夢の中ですら、詩織は幸せでは無かったという漠然とした事実。

窓際からの心地良い秋風で秋月詩織は目を覚ます。

時計を見たら授業中以外と時間が経っていない事に気付いた。

『時間経たなくても夢って見るんだ…。』

心の中で詩織は呟いた。隣の席を見る彼の名前は葉月秋人。

初めて秋君に会って最初に思ったのは『人形』。もともと嫌っていた筈の義父と同じ考え方をしていた事に気付かされて嫌な気分になった。

それから秋君の事を積極的に見る事になった。秋君は最初は本当に何も知らなかった。本人は知っていると認めてたけど、友達の作り方さえも知らなかった。例えるなら無機質で透明なガラス細工。向こう側を除けば見えてしまいうぐらに秋君は傍目から見たら優等生のガラス玉だった。

そんな秋君に気付けば話かけていた。それから樹も含めた関係が始

まった。長い時間もかからずに秋君と呼ぶようになった。

ただそんな時に秋君に話してしまった。家庭の事、義父の事。その時の秋君の顔は今でも覚えている。

「俺が殺してやろうか？」

あんなにも優しく笑った秋君をはじめて見た。それだけで胸がときめいた。だから言葉と表情の矛盾に気づかなかった。

次の日に詩織の義父は殺された。周囲の環境も詩織の事を知っていたから最初は詩織を疑っていた。アリバイは完全すぎるほどに完璧で詩織は直ぐに解放された。

そして次に疑われたのが葉月秋人と源樹。この2人のアリバイもまた完璧だった。警察はこれを『門外法廷』として、魔女狩りに移行要請を申請した。

門外法廷とは起きた事件を実験体または抑止力の犯行と認めることで現在は主に魔女狩りに委託することを意味する。

その中で秋月詩織は『葉月秋人が義父を殺した』という事実が気がついていった。

秋人の横顔を覗き込む。詩織が気づいたのは事実だけではなかった。秋君の事が好き。殺してくれたからとかじゃなくて、もう今までとは違う。きつと秋君の事を愛している。だから、気づいて欲しい。

それでも秋人は詩織の好意を理解できない。それはまだ秋人が人間になりきっていないから。詩織も理解している。だから見守る。悪い虫が秋人に付かないように傷つけないようにずっとずっと。

「大丈夫か？」

秋君が心配そうにこちらを見ている。艶のある黒髪と綺麗な黒い瞳が詩織を見ている。それだけで胸の鼓動が早くなる。

でも、私から触れちゃいけない。だって汚れた物に触れる事ができるのは綺麗な物の特権だから。汚い物が綺麗な物に触れたら可愛そうでしょ。

秋人の手が触れ、詩織の頬をなぞる。

「もう一度聞くんけど大丈夫か？」

「大丈夫だよ。それより秋君の着けている指輪何？」

「婚約指輪」

「嘘」

思わず叫んでしまった。担任教師兼正史教師が睨みつけてくる。自分の単直な行動が恨めしい。

「嘘だよ。」

秋君がノートを取り出し、書き出す。そして狭くは無い机の幅での筆談が始まった。

「秋君ノート買ってたんだ。」

内心そう思わずにはいられなかった。

「その指輪何？」

さつき頬をなぞったときに気付いた疑問を率直に書き出す。

「証らしいよ。俺を守っている証拠。これを見るたびに思い出させるのが目的らしい。」

「それって女の子から？」

「まさか。年上の男からだよ。」

「それって…気持ち悪くない？」

「凜子なら泣いて喜ぶだろ？」

確かにそうかも。凜子ちゃんはそのいうの大好きだしね。でも、秋君にはノーマルで…って何いってるんだろう。

「それより覚悟しといった方が良いぞ。」

「何を？」

「放課後掃除くらいはな。」

最後は筆談では無く小声で秋人は詩織を見て呟いた。担任教師兼正史教師を見ると気たるそうに「じゃあ放課後掃除でもしてろ。」と投げやりだった。

秋月詩織の日常？

放課後の掃除をする。普段の掃除当番とは関係なくその日は二人での掃除。授業を妨害した罪は予想外に重かった。

「教室を二人では…中々つらいな。」

言葉道理に教室を二人で掃除するのは中々に辛かった。二人ともがやるならやるで徹底的にという事で外が暗くなる程度までは時間がかかった。

ゴミ捨てを終えた詩織が机に居座り、足を組む。今日はいつものゴスロリでは無く黒のドレスを着飾っている。詩織の他の追隨を許さない服装センスは狂科学も真つ青だ。

自分の視線を感じてか、詩織は赤らんで足を閉じた。

「後は先生に言いに行くから、詩織は先に帰ってな。」

「え…うん。でも…この頃物騒だし。それに凜子ちゃんだって…」

詩織は黙ってうつむいてしまった。

凜子は家に引きこもっている。源葵の死後、凜子は精神を病んだ。

凜子の家は俺や詩織たちとは違い本当の家族が居る。だから、凜子は幸福に対して一種の無価値を持っていると同時に自分の持っていない不幸という部分に惹かれていた。

そういう立場で人あたりも良く近くに居たのが源葵で凜子は特に彼女に懐いていた。

秋人から言わせれば元々精神が安定しない所が多数あったが、それでも彼女はココに居たのだ。

樹は今まで伏せてあった事実を凜子に話した。それは樹が同じ立場に立つであろう決意の表れだった。

それを受け止められず、源葵の死を伝えた翌日凜子は学校に来なくなった。

「なあ、詩織。この世界ではさ。犠牲つてどこまで許されるんだろ
うな。」

自分でも呆れざるおえない。自分という存在自体が完全な『人間』
を目指し作られた筈なのに。

これから起こる事についての少なからずの犠牲。もう決めた事なの
に秋人にとつての心と呼ばれるであろう部分が拒絶している。
心が落ち着かない…のか。

実際この街に着てから葉月秋人は心という物の存在を完全な人間を
作る上で無視できない事を確信している。

旧史上のアリストテレス、プラトン有名な哲学者は全て抑えている
といっても過言では無い秋人のデータベースのどの知識も明確な心
という物を掴んではないように感じていた。

それは葉月秋人が本来の偉人である彼らとは一線を隔している事。
その境界線は『人間』。

だから、秋人にとつての心は本来の人では計れないのかもしれない。
「例えば人間は飯を食うだろ。俺だったら詩織の作る弁当かもし
れないしそうじゃないかもしれない。でも、その弁当の食材の肉や
何かは別の生き物だった物だ。」

「凄い哲学だね。それで？」

「小学生じゃないが、生き物って『生きてる物』だろ？なら、自分
はそいつを命があるって認めてるって事だ。それなのに…人は食べ
る。それだけじゃなくて無責任に捨てたりしてた。」

昔の資本主義の時代は今の比じゃなかった。秋人もデータでしかし
らないが、それは情性で殺し生きていた時代だと考察している。

曰く資本主義は人を殺していた。だから、滅んだ。

そして今の様な小国に分かれ世界は退屈と別れを告げ『狂科学時代』
というくだらない玩具を手に入れた訳だ。

詩織は首を傾げ、秋人を仰ぎ見る。目には困惑と疑問の感情が浮か
んでいた。

「急にどうしたの？秋君らしくないな。私に相談なんて。」

言われてみて始めて気付いた。思考の死角とも言える場所にその考えはあった。

葉月秋人に組まれたモノは元々その為だった筈なのに相談してしまった事に失笑してしまう。

「そうだな。そういうこともあるのかもしれないな。ごめん。俺が悪かったよ。」

「ううん。秋君違うんだよ。秋君がいつもと違うっただけだよ。」
詩織はスカートを両手でぎゅっと掴み、恥ずかしそうに伏せ目がちに言葉をつづける。

「ただ…秋君を近くに感じたんだよ。なんだか人間みたいになつて。」

「ひどいな。俺は人間じゃないってのか？」

「そういうんじゃないよ。初めて秋君を見た時人形みたいだと思ったの。顔立ちが綺麗で無表情なのがね。」

「でも今は顔が柔らかいよ。こんなの言つと自惚れててるのかもしれないけど秋君楽しそうだよ。」

「自惚れだな。」

間髪入れずに投げ返す。待ってたかのように詩織が笑い自分笑う。
教室に笑い声が響いた。それがなんだか心地良かったのに今の葉月秋人は気付けなかった。

口喧嘩

先生、仕事終わりましたよ。教室が汚かったんで思いのほか長かったですよ。」

職員部屋に訪れ、担任の教師兼歴史教師に振り返る。
年は30くらいの痩身の男。

顔には疲れが隠せないほどにたまっているのか、生徒の前でもかまわずタバコを嗜んでいた。

ここ最近タバコすら吸わず唯煙たそうに授業をこなす。それでも、授業は滞りなく進むのはこの男にとって天職だからかもしれない。

「ご苦労。秋月はどうした？」

「殺しました。」

「なっ」

慌てて立ち上がる。そして胸倉に掴みかかる。

「冗談です。離してください。」

「言って良い冗談と駄目な冗談があるぞ。」

この男にとって人の生死はタブーなのだろう。そして呆れたように椅子に座りなおす。

「珍しく声を荒げるんですね。授業を聞いてなくても怒らないのに、冗談にはおこるんですね。」

もはや聞く価値も無いと空を見ている。しかし、秋人は言葉を繋げる。

「それとも、そっちが本質なんですか？教授。」

驚いたように顔を上げ、教授は秋人を見る。その焦点は間違いなく秋人を見つめている。

「本名『田代田無』。俺も含めてですが、酷い名前ですね。まるでネーミングセンスを感じない。」

「そんな事はどうでもいいだろう。お前今さっきなんていった？」
「まるでネーミングセンスを感じない。」

ボソリと呟いた。案の上田代は焦り腕を崩す。

「おそらく田無さんが『狂科学』に出会ったのは関係の無い事件の一端だ。あなたはこう思っているか知らないが、アレは違う。」

感情が沈み、言い聞かせる。俺に与えられた狂科学が葉月秋人を塗り替えていく。

「だが、不幸なのはあなたがアレを勘違いした事だ。」

田無は黙ってそれを聞く。しかし、開口一番に

「何故、あの事件が違うのか？それは簡単だ。」

言わせる訳も無く塗りつぶす。

「アレは俺が殺した。そもそもあなたには死ぬ権利すら無い。取りあえずは俺の話を聞け。」

矛先をかわし、優位に立ち説明を続ける。

まず一つ目に認識の違いだ。ここで注目すべきは4つの事件。

一つ目に起きた焼死体事件はただ単に俺が殺し、燃やしただけの事件だ。勿論これは今の状況となつてから言える事だが…。

葉月秋人から言わせたらアレは完全に無駄だったわけでは無い。狂科学の実験体としては無く葉月秋人として。

俺は詩織を助けたそれで良い筈だ。

そして、次の日『秋月詩織』がさらわれた。

説明すべき事

『そうだな。まず何処から始めようか…』

思考の海に浸り溺れる。その場所に居るのは自分では無い自分。もはや、自分という概念すら意味をなくしてしまうかもしれない空間。だからそこは世界で一番時が遅い。いや時間という概念すら意味を持たない空間。

「勘違いしているのはこの国に居る実験体がそもそも2体なのかという事からだ。こっち側から言わせてもらえるなら一つの国に魔女狩りが居れば安全っていう考えがまずおかしいね。だってそうだと魔女狩りが捕まえるのはくだらない倫理感を犯した実験体だけだ。そもそも周りに誰が居るかなんて普通は誰も証明できない。」

「ここまで言えば分かるだろ。俺が実験体で教授の考えている最初の一人を殺したんだよ。」

秋人はここまでを言い、力無く呟いた。

大抵の勘違いである。『事件の始まりが何処なのか』という根本的なこの国に住む人間全てが犯している間違いを正す。

秋月詩織の父を殺したのは俺で実験体なんかじゃない。この罪も全部俺が背負ってやる。

「だから、田代田無個人が狂科学を感じたのはアイツでは無く俺だったんだよ。なら俺に協力してくれても良いんじゃないか？」

「どついう事だ。意味が分からない。」

ああ、そうだな。普通分かる訳が無いんだよ。

でも、倒さないといけないんだよ。樹とあの銀炎を戦わすわけにはいかないから。

「もうばらしても問題ないから言わせてもらうと、俺はこの旧国に送り込まれたスパイなんだよ。」

「それに俺が詩織の義父を殺したのは詩織の為だ。だから…なんていうのかな…俺スパイ辞めたんだよ。」

淡々と語ると説得力に欠けるので顎首をかしげ、考える素振りをする。実際考えながら話しているが、田代と秋人では時間軸が重なるわけもないからだ。

「だから俺は狂科学より樹と詩織の味方で居たい。その為に協力してくれ。」

源葵の死因は一発の銃創による出血死。正確に言つとショック死に近いので殆ど即死に近い。

それを教授は知っている。自分が燃え続ける源葵の前で気を失った後、その行為は目の前で行われたのだ。

「つまり、私が意識を失っている目の前で彼女を殺したのか？」

「ああ、そうだ。樹の母を救う手立てが俺には無かったから、苦しまないように殺してやった。その罪も俺が背負う。」

葉月秋人はまっすぐに言い放つ。実際は彼女を思つての事すらも罪と認めている。

「ありがとう、私を咎めてくれて、ありがとう、彼女を殺してくれて。」

「驚いたな。人は殺人者に対してありがとうと礼を述べるのか。」

「彼女を引き合わせたのは私の罪だ。彼女を助けられるという甘言に惑わされたのも私の罪だ。実際に目の前にして気を失い何もできなかった罪だ。」

「分かってないな。その罪も全部俺の物なんだよ。あんたは黙つて協力してくれればいい。」

秋人は思う。人は反省し、学習し、そして人は罪を償いたがる。大抵、罪なんてそいつの妄想か空想で大したことじゃないのに。時に人は不完全だから罪をどうしたら許されるのか考えていない。その癖罪が他人に罰を決められる事は頭の中では違つと理解している。だから世の中自己満足という観念でしか回っていないのだ。

でも、目の前に自己満足の中から抜け出し前を向こうとしている物

もいる。なら人っていうのは悪くないのかもしれない。

『そろそろ反撃するか…。』

誰にでもなく秋人は呟いた。安易な道を選んだと自分でも笑いを抑えられなかった。

夢終わり

これは夢だ。夢の中に居るはずの自分がその事に気付いてしまう程にこの夢は何もかもが甘ったるかった。

夢の中の夢から覚める。部屋は明るく朝光が部屋の中をカーテンの色に染める。樹の部屋の色は薄い青色。

階段を降り、洗面所まで辿り着く。鏡に映ったのは葉月秋人で源樹ではなかった。

『やっぱりか…』

夢の中はどこかがおかしい。その世界では樹は樹では無く、秋人だった。

『おはよう。朝早かったね』

顔を洗っているとき横から、タオルが差し出される。タオルで顔を拭き、見上げる。『源葵』。自分は秋人なのに居たのは樹の母である源葵であった。

『朝ご飯はパンとご飯どっちが良い？』

聞かれ、パンと答え。母はせわしく台所へと帰っていく。顔を洗い終え、歯を洗ってから朝食を食べに移動する。

家族での団欒。失われた日常と自分では無い自分。樹にはこの世界が自分の嫉妬を体現しているか分かっていた。朝食を食べ終わると、学校に向かう。

舗装された道を何も考えずに走るのが楽しかった。夢の中は風も熱さも何も無くて現実味なんてこれっぽっちも無かったが、それでも十分楽しかった。

学校に着くと詩織が朝一番に『おはよう』と返してくれる。

チャイムが鳴って、少し遅れて先生が教壇に上がりホームルームが始まる。

『転校生が居ます。』

先生…ええと確か田無先生だっただけが、転校生を紹介してクラス中

にどよめきが走る。

それもそうだろう、だって転校生は源樹で、葉月秋人はココに座っているんだから。そして、空いていた詩織の席の隣に源樹は座った。夢の中の葉月秋人は俺なのに現実の葉月秋人は俺じゃない。

自分の理想の姿が嫉妬という形で浮かんでいるんだろうか…。

夢の終わりが近いのか、思考が可能になる。結局夢の中ですらアイツの事をずっと考えてる。

『俺が守りたかったのは国ではなくて…唯一人だったのかもな。』
それにしても本当に嫌な夢だな。いやココまで来ると笑えるレベルだ。

『だって、本当の俺は気付いてるんだろう?…が本当の…じゃないって。』

狂化 樹

頭が痛い。目が覚めた時に一番始めに感じたのがソレだ。

次に身体中が痛い。しかし、頭痛と比べるとコレは特に思う事ではないのだろう。

「身体の調子はどうですか？」

身体を起こし、アイシャを仰ぎ見る。

彼女が着ている服は元々の色が白だったのでだろうが今はおびただしい量の血で赤く黒く汚れていた。

「身体よりも頭が痛いな。なんていうか表現しづらいんだけど…。」

「それは良かったです。一応頭の中を数時間弄ってたので戻ってこれるかどうか心配だったんですけど。」

そう言ってアイシャはククツと笑った。

「数時間って具体的にはどれくらいだよ。大体弄ったってどうやってんだよ。」

「簡単ですよ。ただ頭を割って神経を傷つけないように弄れるところを弄れるだけ弄ってただけです。」

アイシャが言い残すと、服を着替えてくると言い残し部屋を出て行った。

こんな所でも「女の子の部屋を見たら駄目ですよ。」と言い残す辺りアイシャは女の子だったようだ。

頭痛を無視し、頭部を手でなぞるが傷らしい傷は発見できなかった。

「綺麗な顔が痛まなかったただけ良かったか。」

自分でも良く分からない言い訳をしておいた。

アイシャが居なくなつた事で改めて部屋の周り見回してみる。

さつきも思ってたが、世間一般の『女の子の部屋』のイメージをぶち壊すレベルで凶悪な部屋だ。

棚にはおよそ自分には理解できない電子部品やら培養器が並べられ、壁には獣の足や腕骨の標本が駆けられている。

これら全てはおおよそ旧国の一般人では『所持不可能』『収集不可能』に限られるのだろう。とにかく見た目が凶悪で他には何のこだわりも感じられないくらいにぶっきらぼうに置かれていた。

実際に愛着など無い事は確かな様で彼女の品々は既に固まっている血で汚れていた。

「自分に起こった変化は理解できましたか？それとも理解する気も無く私の説明を待つつもりだったんですか。そうだとしたら、向上心が無いですよ。」

アイシャがコーヒーを飲みながら部屋に帰ってきた。カップは一つなのでどうやら俺の分は無いらしい、アイシャが出すコーヒーは美味しかったんだが残念だ。

「特に変化が分からなかったん……」

ピシャツと音を立て、口から血が溢れ出た。そのせいで最後まで発音できなかった訳だが、思いの他不快感が無くむしろ身体の中が熱くたぎった。

「早速ですね、貴方に与えた狂科学ですよ。私が作るには生ぬるかったんですが、生憎様忙しい忙しい樹さんには時間が無かったですからね。」

「ごめん。愚痴はそれぐらいにして貰えると助かる。」

アイシャは気恥ずかしそうに黙りこみ、『そ、そうですね』とコーヒーを啜った。

「分かりやすく言うと貴方は現代版の吸血鬼になったんです。」

彼女はニコリと笑った。それは最初に見せた歪んだ笑みではなく、半ば諦めたような苦笑に近いように感じた。

それを片手間に樹の頭にはクエスチョンマークしか浮かんでいなかった。

夜駆ける秋人

夜を駆ける、建物から建物へ数メートルの跳躍を続ける。

最もこの動作も狂科学によって改造された秋人の足でなければほぼ常人には不可能なまでに美しい弧を描いた跳躍だった。

行き先は決まっていた。だからという訳でもないが、秋人は『^{デッド}思体スペース』で遊んでいた。

自身の狂科学である無限思考。文字通り無限に近い時間を思考する事ができる狂科学。秋人がソレを使う中で感覚的にいる世界、つまり秋人自身が居ると感じる世界が『^{デッドスペース}思体置場』だ。そこは崩れかかったごみ山のように空想にふけた思考が雑多に積み上げられている。

出ている結論を何度もまたなぞり直す。本来、起こりえる筈の無いノイズがかかる。

「コレが終わったらココを離れる事に心配しているのか？」

普通ならどう考えるのだろうか？ - エラー

自分の能力では他者の事は予想できても、思考が辿り着いたとしても予測の範疇を超えて完全な予測に辿り着く事はできない。

『過去108293件実験回数中の成功例は10891。正答率は小数点第十一位までを除く確立でクリア。』

本来起こるはずの無い個人的な現象。コレを解き明かす事が自分という実験体の完成につながる。

そう信じる事で秋人はこの旧国で生きてきたつもりだった。

けど、それは樹と詩織との生活が変えていった結局実験体『葉月秋人』は…。

樹や詩織がこの世界で秋人の目から離れ一人ひとりの生活をしていく。それはきつとこれから秋人と過ごす時間よりも濃密で楽しい時間だろう。

そんな未来を予想し、現実にする為に戦う。

「守る為に戦うか…。安っぽい実験体には丁度良いな。」

今の秋人には完全など無いという事に気付いていた。

それは秋人が失敗作である事を示している。

それでも秋人は自分が人間だという証明ができた事の方が嬉しかった。

そんな気がして秋人は飛んだ。

狂科学対狂科学

「早かったな。それも当然か。お前が自ら指定した場所まで来てやったんだからな。」

学校の校舎を駆け、階段を飛ばし辿り着いた屋上で待ち受けるは実験体。

憎い憎い悪役の座を自分から取りに行った愚か者。

「驚いただろう？人質にさらった人間がメモを持っているなんてさ。」

「詩織が殺されていたら、どうした？」「犯されていたら」「黽られていたら」「切り刻まれていたら」…。

頭の中に浮かぶ最悪の選択肢が事実を知り、承諾した事で消滅する。危惧していた事はコレで全て無くなった。

後は、コイツを倒して生きてこの街を去る。それで全てが終わり、始まる。

『葉月秋人』が終わる。

胸の中に火が灯る。逃げ出したくなる様な焦燥感。

ああ…。コレが『悲しい』という感情か。

「どうしたの？走馬灯でも見てるの？」

安い挑発をかけてくる実験体を見直す。教授から聞いた実験体と相違ない。

「安心しろ。勝つのは俺で負けるのはお前だ。それにどうした前にあった時より、口が重いじゃないか。何かあったのか。」

明らかに前の校舎で見た時とは様子が違う。

例えるなら、酔っ払いの会社員とそれを送り届ける運転手。要するなら気分が浮ついていない。

恐らく、狂科学の実験体を殺せば頭の中で興奮物質でも作用するように設定されているんだろう。

「すつきりするんだよ。お前らみたいな狂科学の実験体を殺すとさ」

あ。
」

- 正解

どうやら俺はこいつもこいつを作った狂科学者も好きになれそうに無いようだ。

それは秋人を作った狂科学者も同じ事だ。

思考の海に浸り、相手の腸を抉^{はら}って曝け出す行為自体に快楽を得るというプログラムを植えつけた狂科学者と自分自身も例外では無い。だから、葉月秋人は自身が嫌いでそれ以上に目の前に居る実験体が許せない。現実を見させられるから。

『決して俺は樹を詩織を好きになつてはいけない。』

そう。どんな無機質な俺ですら愛情つていうのは伝染していくんだから、そんな俺が愛を伝えるわけにはいかない。

「教えてやる。世界で一番大切なのは『愛情』だ。だから、俺達は居てはいけない。俺達みたいな実験体が人を殺す事で憎しみが生まれる。そして、人が狂科学に手を出して狂いだす。」

認めたくは無い。秋人と目の前に居る実験体は同じ。狂科学者の欲望を満たし、果てには人の死すらもいとわない。

「俺がお前の立場ならお前のように人を認めない実験体になってたかもしれない。だから、お前が許せない。」

湧き出る感情は憎悪。パラレルの自身を見てるようで目の前の現実が許せない。

「御託は良いよ。お前に俺は殺せない。俺にとってはそれだけだから。」

実験体は深く深く沈み構えを取る。それは地に這う獣の様に顔を伏せる。

「始めようか。俺の能力名は『^{キングノスフェラトゥ}絶対不死者』。文字通り死にもしないし、朽ちもしない。絶対無敵の狂科学。お前は？」

敵はどうにもなく自分の解説を始めだした。本来それを暴くのが俺の狂科学の真骨頂なんだが。

その上こちらにも解説を求めだしている。本来なら聞き届ける理由

も無いが、いいだろう。

今日の秋人は気分が悪い。だから、ずたばろにしてやる。本来隠しているであろう物を暴き殺してやる。

「能力名『無限思考^{ドリーム}』。文字通り夢見がちなただの厨二病だよ。」
元々秋人の能力は敵に知られようがどうでも良い。

だから高らかに名乗ってやった。それを皮切りに戦闘が始まった。

狂科学対狂科学？

地に伏せた獣が疾走する。予備動作も何も無く、一直線に秋人目掛け疾走する。

秋人は指に嵌めた指輪を復元する。

復元した技術は『形状記憶金属』。これも彼が世界にもたらした狂科学の一部。

使い方は文字通り形状を金属に記憶させ条件に従い復元させるという物。

しかし、この技術が破格と言われる由縁は復元させる金属に制限が殆ど無いところだろう。

文字道理コレは特定の金属ではなく金属郡を加工させる技術体系を意味したのだ。

秋人にとって取るべき戦略は決まっている。与えられた情報を整理考察し導き出した複数の結論を効率良くつづぶ。

注意点は一つ相手に触れられない事。

『なら…』

一瞬の長考。それも秋人の精神世界での事で現実時間にすれば測るのも馬鹿らしい程の時間の長考。

「v w r 1 . 銃」

復元した姿は大銃。秋人でも宙で撃てば身体が吹き飛ばざる負えない程度にはこの銃は大砲である

しかし、この銃で特筆すべきは銃自身の大きさでは無い。特筆すべきはその銃口。直径は約20cmの大筒。

秋人は復元した銃を確かめ走り出す。お互い考える間すらない一瞬での駆け引き。優勢は秋人。無限思考は数千数億の攻守を予想する。迫りくる実験体の右腕を掴み、空中に投げる。片腕で弾を詰め照準を合わせ引き金を引く、瞬間爆音。自称不死者の頭が吹き飛んだ。

後ろに跳躍し、間合いを取る。案の上、傷口から白い炎を弾けさせ復元した。

『空間を捻じ曲げている訳ではないんだな。』

内心良く思っていないが、予想外の自体が起こっていない事に若干安堵している。

『ここまででは大体教授の言った通りで傷を受けたらその箇所が燃え盛り再生する。』

ゼロ距離での射撃。さすがにこの大質量を一瞬で無効化するだけの空間跳躍または歪曲は考えにくい。たとえ狂科学だろうと不可能な事は存在する。

秋人の神経及び全感覚は『無限思考』の監視下にある。

『つまりアレは幻の類では無く。現実には貫いていた。』

超回復の類では頭部の再生は不可能。更には白い炎の説明ができない。

考えられる可能性を手当たり次第潰していく。

結論、予想していたケースの中では最悪のパターンが当てはまった。

「どう分かった？俺の狂科学の『中身』？」

得意げに腕を組み投げかけられる。その顔には笑みが走っていたが、その笑みからは分かるわけが無い『嘲笑』の感情。

他者の上に立つ『優越感』。分かりたくも無い感情が入り混じっている笑みだ。

『愚図が…』頭の中で吐き捨て思考を整理する。

「世界による抑止力による実際に起きた自称に対す世界の修正または運命的抑止力といわれる物の類だろう。」

間髪入れず答える。狂科学と対を成す運命学。恐らく、相手の着けている武装は狂科学の物では無いのだろう。

その証拠に相手の起こした事象には変化が無い。あるのは漠然とした死ななかったという事実と白い炎だけ。

「その白い炎が世界から修正を受けている時の現象なんだろう。俺も初めて見たがそれが力ある『抑止力』だよな。」

『曰く、世界は狂科学を受け入れない。』

これが運命学の第一文。世界で今最も流行っている教団＜カルト＞の聖典だ。

最もタチが悪いのはこのカルトを立ち上げたのは狂科学者である事だが今はそんな事どうでも良い。

この運命学は誰がどうという話では無く、世界が我々をどう捉えているかというのを題材にしている。

そこで出てくるのが『抑止力』という単語である。

例えば、人間を壁にぶつけてみよう。それも物凄いスピードでだ。

すると、電子の塊である配列の隙間を通って壁をすり抜ける人間が何兆分の1という確率でいる。

それが旧学問の考え方の一部であつた。しかし、運命学はコレを可としない。

具体的に云うとそれを世界が許さない。

その現象が現実で見えないのは、世界が『人が壁をすり抜けるという現象』を認めていないから、または認識しないからという考えが運命学である。

「うん。正解かな。これは狂科学の一部である運命学の一部を利用した力らしいね。自分でも良く分からないけど、俺は初めから死んでるから世界は俺を殺せないらしいよ。」

声を出して、実験体は笑い出す。この事実はカレが人では殺せないという事を意味するだけでなく、秋人に現状カレを殺す手段が無い事を意味している。

「どうする？尻尾を巻いて逃げるかい？それとも、命乞いでもしてみろ？ほらよく考えてみなよ。ヒヤハハハハ」

木霊する笑い声が屋上に響く。それとほぼ同時に実験体の周りに銀色の炎が円を描き、秋人を包む。

「これで逃げられないけどね。」

秋人の中の線が切れた。秋人も笑い出す。

二人の男が笑っている。一人は迫り来るであろう絶対的快樂に、も

う一人は前の男が馬鹿らしくて。

「馬鹿馬鹿しい。お前も嬉しそうに語るな驕るな間違えるな。いいかく聞け『抑止力』は世界の為にしか働かない。もし、働いていたらしたらそれは抑止力じゃない狂科学だ。」

達者なピエロの仮面を被るのは止めだ。コイツを煽てさせる理由なんて無い。もう分かったからコイツを庇う理由なんて無い。

「知ってるか？相対性理論では時間を歪ませるのは空間を歪ませるのと同じ義なんだよ。それともう一つ質量とエネルギーが同意なんだ。」

呆れた口調で秋人は語る。ただ単に敵にとっての内臓を臓物も中身をぶちまける。

たとえ中身が腐った紫色の野菜ジュースでも秋人は飲み干せる。その為の器、その為の『無限思考』。

「それは昔から見られた現象の一つだったんだよ。火の色は低温だと赤く高温だと青くなっていく。そして、ある一定の温度を超える」と白くなる。そして更に温度を上げると銀に近づく。」

例えを上げるなら、火を起こすと、周囲の空間が熱で歪む。それは日常で起こる現象としては些細な物だが、見方を変えたと人間の異常か空間の歪み。人間側からすると空間の歪みであり、世界側から見ると人間の認識の異常。要するに唯の熱での空間の揺らぎ。それを世界が抑止力で修正する。結果、発生する能力は一定時間自分自身の身体の状態を逆行させる能力。

種明かし。相手のジュースの中身を言い当てメチャクチャにする。その瞬間がたまらなく『気持ち良い』。

「種は簡単だ。お前は超熱量で空間を歪ませ時間を逆行させているんだよ。」

「証拠は？」

実験体は震えて問い返す。

その震えが何を意味しているか、秋人は正確に掴み断言する。

「怯えてるな。俺に。俺の狂科学に。」

「聞いているのは俺だつて言ってるだろー。――」

激昂。もう理では抑えきれない所まできているのだろう。実験体にとつて中身はそれほどまでに大事で大切な物なのだから。

「何なら試してみるか？お前が俺も燃やす事ができるかについてだ。断言してもいいが、不可能だ。何故なら、俺はお前に捕まらないし、触つてやらない。」

実験体は葉月秋人に飛び掛る。殺すという明確な殺意を持った跳躍。しかし、秋人はおくすことなく右足を穿つ。衝撃で実験体は吹き飛ぶ。

「ほら、銀の炎で直ぐに直るだろう。この距離でなら空間が歪むのも視認できるしな。」

だが、それも数の問題だ。数とは弾数だんすうと残数ざんすう。秋人の銃の弾は全部で五発装填できる大砲、比べる実験体は残機ほぼ無制限。

つまり弾が銃身に無くなった時にこの距離は保てなくなる。

「何発装填できるか知らないけど、俺より多いって事はないよな。」

実験体も理解していた。この戦いに『接近戦』を避ける手立てが無い事に。

「その通りだ。銃身には残り三発。」

秋人は思考する。現実には与えられている判断材料の中でコイツに勝つのは不可能だ。

最たる原因が実験体の基本性能つまり身体能力は秋人のそれを軽く凌駕する。最初から覚悟していた事とはいえこの差は思ったよりも重たかった。そもそも戦っている土台が違う。秋人は狂科学で狂化されているとはいえ実体があり、実験体には実体無く身体は高エネルギーギー体で構成されている。つまり実験体には制限が無い。

最初の一撃は無限思考でどうにかなったが、次の一撃は最初に秋人が一撃を入れても耐えて触られたらそれで終わりだ。

『あと、2発。』

銃身の弾が減っていく。弾の数は秋人の残りの時間と直結している。

『なら簡単だ。できるだけあがく。』

思考する。内容はこれから手順ではなく、思い出。この一年で過ごした思い出とほんのちよつとの父親との記憶。

そして最後の一発を撃ち終え、実験体と対峙する。身を構え万全の体制を取ってなお葉月秋人は実験体につかまった。

再会

全力で実験体を蹴り飛ばす。屋上の扉にぶつかりゲホゲホと汚物を吐き出し、再生する。

『ここはどこだ?』

真っ白い草原に秋人は居た。草原というよりはただの原っぱといった方が適切なのかもしれない。

周りを確認しても誰一人居ない。

『確か俺は実験体に燃やされたんだっけ。あんなに宣言したのに力ツコ悪いな。ということはもしかしてここって死後の世界って奴かな。』

そう思うと感慨深くなったのもう一回周りを見渡してみる。そして頭の中で無限思考を使おうとしても使えない。

『死んだら、狂科学も無しか…。俺って本当に無様だな。誰も守れず、意思も貫徹せず死んでいった。これ以上の最悪は無いな。』

草原に寝転がり目をつむる。

『ごめん…。これで終わりかも。』

『馬鹿かお前は死後の世界なんてあるわけが無いだろ?あるとしたら聖者の妄想かおまえ自身の妄想だ。』

目を開けた先には赤毛の男が居た。秋人に父親と呼ばせていたあの男が…。

景色もさつきまでとは違いビルが草のように生えている。そして蟻のように行き交う人々。

それぞれスーツを着てネクタイを縛り、同じような速度で歩いている。

『おい。こっちを向け。折角お前にセカンドチャンスを与えてやるうというのに。』

『ちよっと待て。俺は死んだんじゃないのか?大体お前は誰でここ

はどこだ？」

「まあ、いいだろう。ココでの時間は永遠だが、現実では一瞬とも満たないんだ。話をしようか。」

赤毛の男は呆れた口調で語りだした。

「まず、最初の疑問に答えてやろう。返事はどうした。」

「ああ。頼む。」

「結論からいうとお前の未来は死だ。確実にお前はあの場で死んでいる。この場所から逃げた瞬間にお前の首の骨は折られて首と胴体が永久におさらばかもしれないな。そして第二の質問だが、お前は誰だか…。これは答えづらい。お前を作った時にお前にはロックを掛けた。それに関するただの説明役それ以上でも以下でも無い。分かるか？」

これは無限思考を発動した状態だから無限思考が使えない。更には今までブラックボックス扱いしていた思体置場の中身がこのビル群という事。そして俺自身の狂科学『無限思考』の説明役がこの目の前の男だという。それ以上でも以下でもない事実。

「待ってくれ。説明という事は俺はこの無限思考を使いこなしていないという事なのか？」

「いや…。そこのところに関しては説明がしづらいな。」

赤毛の男は頭を掻き数秒悩んでこう続けた。

「葉月秋人は無限思考を完全に使っている。この能力は確かにお前の思っている通り無限の思考の中から未来を推測し、あわよくばその未来さえも変えてしまおうという能力だ。だが、お前は自身について勘違いしている。」

「勘違いだと？」

「その通りだ。お前は他の実験体とは違い自由が与えられている。だからお前がたとえ秋月詩織とイチャラブな生活を送ろうがお前の自由だ。だからお前がどんな生き方をしようとも自由だ。」

「…」

黙るしかない。衝撃を受けたところは自由だと言われたことではな

く秋人のこれまでの行動も想定内といわれたも同然だということに
だ。

『肝心の話はお前にかけたロックについてだ。結論からいうとお前は機能を封印された状態にある。』

『だからどうする。俺はもう少して死ぬだろう。ならば俺には関係ない。関係ないんだ。』

感情を吐き捨てる。どうせこれは密室の中身。狭い密室・秋人の脳内。

『最後だから言わせて貰うとな、あんたの言うとおり俺は人間になりたかった。確かに俺はお前に拾われなければ死んでいた。でも……それでも』

『俺は樹や詩織と一緒に行きかった。狂科学とか関係無く毎日馬鹿みたいに笑いたかった。』

いつも感情を風化させるであろう無限思考もココでは使えない。自分の中で起こった問題も自分の中の悠久の時間が全て解決してくれる。それはただの自己完結だが、秋人のノイズをかき消してくれる。

それが今は無い。だから秋人は生まれて初めて感情を爆発させている。

『それだよ、秋人……。』

赤毛の男は不意に呟いた。

『おめでとう秋人。第三の鍵になる『生存意識』と第一の鍵『感情』だ。』

赤毛の男は腕を差し出し中世の騎士のように屈みこむ。掌の中には二つの鍵。遜色もない黄金の鍵。

『説明を第一の鍵『感情』についてだが言うまでもなくお前には不必要な物だ。だからこそお前はそれを理解しなければならない。何故ならお前以外の全員は感情にしたがって生きているのだから。』

大げさに劇のように身体を使って男は表現する。

『そして第三の鍵『生存意識』だが…。』

男はそこで話すのを辞めた。くるりと回り秋人から目を離し後ろを向き指をパチンと鳴らした。

世界は真つ暗になった。さっきまでのビルや人込みも何も無いただの闇。人が常に恐怖を持ち続けた畏怖の対象である闇。

『話すのは終わりだ。お前は五つの箱から好きな箱を選び解錠しろ。中には機能が入っている。』

目の前には五つの箱。四つの金色の箱と一つの黒箱。

『ただし、その黒箱は辞めておけ。そいつは最後の鍵じゃないと開けられないからな。』

『中身についての説明は？』

『無い。というよりはできないといった方が正しい。』

秋人の口から『はあ？』と言葉が漏れる。

『言っておくが、俺はその中身については全く知らない。つまり n o t o u c h だ。』

『意味が分からないぞ。俺を作ったのはお前だろう。』

赤毛の男はあからさまなため息をつき、めんどくさそうに空を見上げた。

『お前を作ったのは俺を含めて五人だ。俺が作ったのは無限思考を使った へのアクセス方法の理論だけだ。』

『ああ？なんだって』

『おつとすまない。まだ、この言葉はロックが外れてないらしいな。』

『どういう意味だ？』

頭が割れるように痛い。さっきの言葉の聞き取れない部分を聞いてから加速度的に痛くなる。

いや聞き取ってはいるのだろう。だからさっきのが言葉だと頭の中が理解している。

『今は深く考えるな。現実に戻れば考える時間なんて幾らでもある

だろう。」

男はマントをひるがえし、後ろでに手を振りながら暗闇を歩いていく。

『まあ、がんばれ。現実の俺にあつたらよろしく言つといてくれよ。』

音もたてずに赤毛の男は消えていった。

消えていった男から視線を切り返し、箱に振り返る。何の感慨も無いといえば嘘になるが、自分の中の赤毛の男に会えたのは少し嬉しかった。

『そういえば名前を聞くのを忘れていたな。』

無限思考が無いと取りこぼしがあるから大変だ。

狂科学が無い。この状態が普通の樹や詩織の状態か頭では理解しているつもりだったが、実際に体験すると違うんだな。

『悩んでいても仕方無い。まあ開けてみるか。何が出るやら。』

端の箱から順に秋人は二つ開けた。中に入っていたのは力だった。

狂科学対狂科学？

「言い残す言葉とかある？覚えておくつもりは無いけど聞いてあげるよ」

実験体は秋人の首根っこを掴み問う。

約数秒秋人が身構え反応するよりも早く為すがまま秋人は実験体の暴力に晒されていた。今はその終焉。

「無いなら良いよね。ああ…そういえばさっき思ったんだけどさ。俺の狂科学を暴く時のお前の顔最高に歪んでたよ。」

秋人は答えない。自身のその時の顔など知りたくもないし聞きたくない。

「ええと…他にも言いたい事あったんだけどな。もういいや死ね。」

実験体は掴んでいた首を片手で締め上げる。ビキッと嫌な音が少しずつなっていく。

締め上げ、締め上げていく。

『離せ。』

実験体は秋人の首から手を離す。秋人の体がどつさと地に落ちる。

「えっ…」

秋人は「カハツカハツ」と呼吸を直し、身体を調べる。

『左腕は折れてて、右足は怪しいな。後は体中が痛い。』

「おい。何した。」

実験体は呟く。秋人はその間にも思考をする。まずは無限思考の動作を確認する。

「何しやがった。」

実験体はどなりつける。

思考と時間との体感時間の比率 正常

実験体との距離 約3m

秋人自身の状態 黄色信号

「何をした」

秋人の持てる限りのスピードで間合いを詰め実験体を蹴りつける。実験体は蹴りつけられ、屋上の扉に激突する。

蹴りつけられた頭を一瞬押さえ銀炎が煌く。実験体は顔を上げる。

その目に映っている感情は『驚愕』と『困惑』。

「『どういうことだよ』」

「か？」

相手の思考を読み、先うちする。

「残念だがお前の勝ち目は無くなった。さっきまでとは違いお前にとっては文字通り残念ながらになるがな。」

実験体は駆ける。傍から見るなら疾走であり自然現象に例えるなら疾風になるだろう。

だが、秋人にとってもはやそれは意味を為さない。

繰り出された拳を秋人は右手で掴み、蹴りを入れる。実験体もそれに反応し回避する。

実験体は驚愕する。実験体にとって避けることが容易い攻撃をくらう。もし仮に反撃を食らっても実験体は反撃の瞬間に自身を銀炎化し焼きつくすつもりだった。

だが、現実には裏切る。実験体は気がつけば宙空蹴りだされていた。

「宣言しよう。お前は次の行ってでチェックメイトだ。当然チェスとは違い俺はお前を……」

「殺す。」

「何をした。体が思うように動かない。」

『やれやれ。こいつはまだ種が分かれば勝てると思ってるのか……。』

葉月秋人が手に入れた能力は2つ。

能力>命令<俺はあらゆる物に命令できる。

能力>感覚共有<文字通り他者との感覚をリンクさせる。

この2つの能力を使って俺は実験体を倒す。どちらの能力も使用条件は厳しいが強い。>命令<は直接相手に触れた状態で相手に話しかける事が絶対の条件で、その他には相手との意思疎通ができてい

る事が条件。＞感覚共有くは半径10m以内に相手がいる事。そして共有させたい相手と感覚を共有させる事ができる。

俺は実験体と詩織の感覚を共有させている。今、実験体はそこらの女子中学生程度の反射神経しか持ち合わせていない。だから実験体は能力も身体も制御しきれない。

『詩織に負担をかける前に実験体を殺さないとな。』

だから挑発する。これでもかってほどあからさまに。

「お前が持つエネルギー量は人間の比じゃない。そうじゃないと、お前の能力は役に立たないからな。それでもお前のエネルギーは有限だ。」

「お前は能力を使った後『腹が減る』らしいな。教授から聞いたよ。その理論だと源葵が燃えたのも説明がつく。本来超金属の加工は生半可な温度。例えば数千度の溶鉱炉ではできない。だが、お前の体自体が高威力のエネルギー体なら全てが説明がつく。」

源葵が使っていた超銀には電気信号に過剰なまでの変化を見せるといった性質もあるが、秋人はそれを踏まえて宣言する。

「確かにある意味お前は『抑止力』を使っているよ。なんたって空間が逆行しているのにその周囲の空間まで逆行していないのは抑止力のおかげだもんな。」

「抑止力を使わなければ完成しない狂科学無様だな。」

秋人は吐き捨てるようにつぶやいた。

「だからあああああつあああつあああ。」

意味不明な激昂を吐き捨て実験体は走り出す。彼自身自分の本来の名を覚えてすらいない。

だから貰った力にはそれ以上の価値があった。それを目の前の男に台無しにされた。

『コイツは俺の全てを…。』

頭の中に浮かんだ言葉は一つだけ。

『馬鹿にするなああああ。』

腕に炎を燃やし、彼は走り出した。

『まずいな』

詩織があゝの演算に耐えられるかどうか怪しい。詩織の脳にアクセスした時に容量は良かったが想像以内だった。

差し出された腕は燃え盛る炎の槍のごと突き刺す。それを秋人は銃で払う。

体勢を整えられずに無防備に空いたどって腹に蹴りを入れ、嫌な音が響く。

そして炎が燃え、傷を治す。

その間に秋人は4発の弾を相手にぶち込むそれぞれ右手、左手、右太股と左太股。打ち抜かれた物はまるで悪魔の釘にえぐり抜かれたかのように残酷で醜悪な傷を残す。

「別にお前が死ぬまで殺しても良いが、痛覚は残ってるんだろう。」

秋人は容赦しない。形状記憶金属を更に変える。求める物は剣。

「ver. 2ソード」

秋人の声で銃は変わる。理解し姿を変える。瞬間、時間にしてコンマ数秒。銃は剣へ劇的な変化を遂げる。

表れたのは白銀の帯剣にして大剣。抜き、傷つけた四肢を直す間も無く切り捨てる。

崩れ落ちる身体に沿わずように大剣を切る。頭蓋から真つ逆さまに振り下ろす。

「ダルマにして真つ二つにしたんだ。それでも生き返るのか？」

吐き捨て、その場を去る。

幾らでも生き返るのなら簡単だ。生き返らなくなるまで殺すか、直す機構をぶっ壊せば良い。

銀炎を作るよう指示する場所があるのが確実なら、その場所を隔離すればそれで再生が終わるのは明らかだ。

最初に頭を吹き飛ばした時に再生したのはコイツはもう個としての実験体では無く、郡としての実験体。その証拠として頭を吹き飛ばした時と腹を蹴り飛ばした時とでは再生速度が明らかに違っていた。

結果『再生しない』。コレで終わった。後はただこいつの身体が霧散して消えるのを待つだけ。

そうすれば、あいつらも元通りの生活ができる。そう思えば、顔に笑みが浮かんでくる。

これが嬉しいという感情か……。また一つ人間に近づけた。感慨にふけるのも悪くない。

帰路に着こうとした先に源樹が居た。

思考 結果 転がる死体 転がっている詩織 立ってるのは秋人だけ。簡単すぎるがそういうことだろう。後ろ手に葉月秋人は逃げ出した。

エピソード

「なあ、アイシャ何処から間違えた？」

教会の椅子に足を組み、樹はアイシャに問いかけた。

明確な答えを期待する訳でもなくただ自分の苦痛から逃げたくて。

アイシャはアイシャで教会の窓を梯子に登りながら鼻歌交じりで拭いている。

「うーん。多分ですけど、私が居たのが計算外だったんじゃないでしょうか？」

「純粹にどういう意味？」

率直に聞いたつもりだったんだが、アイシャはくすくす笑っていた。

「だってその秋人さんって人？直ぐにこの街から去ったんでしよう。それって樹と戦いたくなかったって事でしようから。そもそも私が居なかったら、樹はその場所に辿り着くのは不可能だった訳ですしね。」

アイシャに話してから一時間も経たないのに此処まで考えてくれるのは正直嬉しい。

でも、あの時の俺は秋人に襲い掛かった。

そして俺の力で秋人に傷を負わせた。それも決して浅いとは言いい切れない傷を。

アイシャの話通りなら単体で活動している実験体はそこその回復力を持つてるから大丈夫らしいが、それでも俺は…秋人を傷つけた。「秋人さんに会って樹はどうしたいのですか？」

純白のシスターが太陽の光を受けて、ガラスに受ける逆光を受けて天使のように樹を見下ろしていた。

『まるで懺悔だな。』

心の中で自分を笑う。16歳にもなって自分の心を自分で把握する事ができない自分に苛立ちが走る。無意味に頭をかきむしる。

「あの時、秋人に会った時に思ったのは秋人があんな事をしたのも

夢なんじゃないかって。でも、俺の頭は冴えててさ。」

「当然です。樹さんを改造したのは私ですからね。」

アイシャは脚立の上で胸を張ったが如何せん胸が無い。

「どこ見てるんですか？」

心を読みやがったさすが旧国1位の指導者。これ以上は止めておこう雑巾が飛んでくる。

「次に思ったのは意外にも嫉妬だったんだよ。詩織にあんなに愛されてて何で秋人はそこに居るんだって。」

死の間際に見た夢で俺は秋人だった。それは多分秋人の事を嫉妬してたんだろっ。

ずっと詩織の隣に居たのは俺だったが、詩織が見てたのは秋人の事という事実が嫌だったんだろっな。

「今になって思うんだけど、秋人と俺の違いは実際に手を汚せるか汚せないかだと思うんだ。秋人はいつも誰かの為につて考えながら、自分を削ってただろ。それに比べて俺はなんていうんだろっな…。」

何も考えてなかったのかもな。話が反れたなごめん。」

「そして最後に復讐心かな。以外にも俺の大義はおれ自身の存在よりも下だったんだよな。」

強化された脳細胞のおかげなのか過去の記憶も鮮明だ。こればっかりはアイシャに感謝しなければならぬな。

「結局、スペシャル美少女アイシャちゃんが施した狂科学で嫉妬に狂った樹は皆に愛されていた超絶イケメンらしい秋人さんに襲いかかったわけね。」

事実はそののだが、まるで俺が秋人に欲情して襲い掛かった風に改ざんされているので話を戻そう。短い付き合いだがアイシャに口で勝てないのはよく分かっているんだ。

「話を戻すとだな。」

少し声を張り上げる。アイシャはくすくすと年相応の笑い方を見せてくれた。

この笑い方の方が狂科学の話をする時に見せる狂気じみた笑みより

アイシャには似合っていると思った。

もし、アイシャが指導者ではなくただの同級生だったとしたらとても素敵だと。

足を振り上げ教会の床を蹴る。気持ちの良い音もならず苦笑する。椅子から立ち上がり来た道を振り返る。

「実際会ったらどうなるか分からない。でも取り敢えず…」

決意を込めてドアを開く教会のドアは来た時よりも軽かった。

「一発殴って連れて帰るよ。」

樹は空を仰ぐ、仰いだ空は樹の決意を応援するように真つ青に突き抜けていた。

傷を負わしてしまった親友、母を殺したかもしれない親友、友達が愛したかもしれない親友。結局あいつは何を考えてるんだろう。

まあ無理に考える必要なんて無いだろう。どうせこの空の続く何処かで秋人は生きていて俺も生きてるんだから。

「どこかで会えるだろう。」

追伸

秋人さんへ

あなたの問いに答えましょう。

あの夜にあなたが血まみれで私の前に立ち尋ねました。秋人さんの友を思う想いが真実だと理解し私は真実を話しました。正直に言うとは私はもう諦めてしまいましたから。

だから、私はあなたに想いを託すのです。ほんの些細な事でも良い、彼に祝福を幸福を愛情を与えられるであろうあなたに。

ご推察の通り源樹は『彼』の忘れ形見です。彼の血を引いているのは樹一人なのです。

我々魔女狩りと指導者両名は『五人の科学者』が源樹を探しているという情報を独自に所有しています。

ですから、秋人さんあなたの推理は8割方正解でした。

彼の未来は英雄となるか、人類を果ては『抑止力』さえも滅ぼす魔

王になるかなのです。

でもこんな事実を相手にしてもあなたならきつと笑うのでしょうかね。

第一位指導者 アイシャ・ノーズ

グシャグシャに書き捨てられた再生不可能紙のメモより。

エピローグ（後書き）

ココまで読んでくださった方ありがとうございます。

一応章ずつで別々の日に書いていたので文にかなりの差があるのは分かると思いますが、あえて誤字脱字以外は修正してません。見直しは一日ずつでしていたんですがね（笑）

物語を広げたまま終わるといふなんとも『俺たちの戦いはこれからだ。』的な終わり方ですが第二章と書いていきたいと思っています。

後がきまで読んでくださった方本当にありがとうございます。
ではまた会えることを祈りつつそれでは…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4348p/>

狂科学時代

2010年12月30日15時59分発行